

●コレクション・データ

時代 弥生時代後期
調査 羽子田遺跡第11次調査
発見年 1998年
大きさ 長さ44cm、最大幅24cm
展示位置 第3室 「埴輪の世界」



入れ墨を表現した 盾持ち人埴輪

第3室に入ると正面に、人物埴輪^{はにわ}の頭部が展示されています。本来この埴輪は、盾を持った人物の胸部と組み合わせたもので、「盾持人埴輪^{たもちひとにわ}」と呼ばれています。頭部と胸部を々に作り、頭部を胸部にソケット状にはめ込みました。胸部はまだ見つっていませんが、全体で約120センチの高さになると思われます。

さて、この盾持人埴輪の頭部には、台形状の透かし穴や縁取り線が見られ、冠^{かぶ}り物を着けていたと考えられます。さらにこの埴輪で注目されるのは、両頬に見られる鋸^{のこ}状に描かれたヘラ描き線です。恐らく入れ墨を表現したものでしょう。

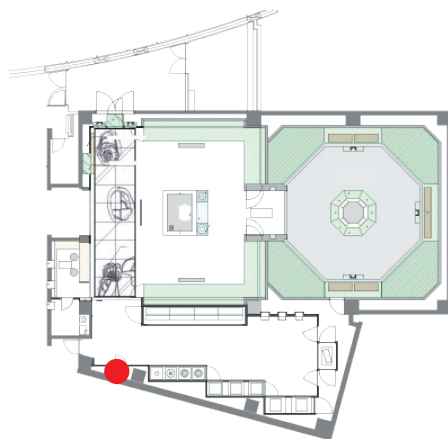
『三国志』魏志倭人伝^{けいしあじんしん}には、「男子は大小無く皆鯨面文身する」とあり、弥生時代以降、倭国には入れ墨があったとされています。実際に、弥生土器や石棺には、入れ墨をもつ人物の顔を線で刻んだ例があり、倭人の記述を裏付けています。

しかし、弥生時代に入れ墨を表現した資料は瀬戸内や東海、関東・東

北に分布し、近畿地方では見られません。特に唐古・鍵遺跡では、全国の半数以上の絵画土器が集中しますが、やはり人物を描いたものに入れ墨は見られないのです。近畿で入れ墨の表現が見られるのは古墳時代からで、馬を曳く人や盾持人・力士などの人物埴輪に入れ墨が見られます。いずれも5世紀以降と考えられています。

『日本書記』によると、猪飼^{いかい}・馬飼^{うまかい}などの職能集団や安曇氏^{あずみ}などの海人^{あま}集団、隼人^{はやと}・蝦夷^{えみし}に入れ墨が見られるとあります。これらは、大和からみて周辺地域に故地をもつ集団が多く、王権に奉仕するために大和周辺に定住したものと考えられています。入れ墨をもつ人物埴輪は、こうした集団を表現した可能性が高いでしょう。

埴輪に見る入れ墨の表現は、彼らの職能や出身地を語っているかもしれません。



ミュージアム上面図と展示位置